

第二期 第四十六号 (初版) (無料)

音信不通

2020.05.20

本のビオトープ
定有堂書店 発行

具体と抽象

奈良 敏行

(定有堂 店主)

具体と抽象

通話

独り遊びの愉しみ

音信不通の先で会いましょう

こどもと歩く日記

八代日記 (二)

風と星と雲と

パスハ

鳥取あれこれ その四十五

ひそやかな声 くビターマイヤアーの研(続)

コロナの時代の愛 (上)

緊急「コロナ会議」地球探検家の証言く

まつりのあと

さよなら二元気で

…… 編集後記

奈良 敏行

水原 涼

萩原 俊郎

ワクサカソウヘイ

鳥居 貴彦

齊藤 仁昭

ムラカミヒロシ

山本千津子

内田 克彦

秦阜 梅林

古賀 啓三

芝野 浩貴

あきの素生

ドラメリア



五月十六日に米子の「本の学校」で「本のある暮らしを考える」というテーマで、ミニ講演とシンポジウムを行う予定をいただいていたのだが、新型コロナウイルスに配慮し延期または中止の状態となった。

いつも定有堂の半径わずかの範囲でしか考えないので、この機会に少々襟を正して視野を広げて勉強しようと取り組んだ。具体的には、鳥取県立図書館相談担当の高橋真太郎司書に、この課題を初歩から指導してもらおうことを企てた。

十数点の書籍と三十点ほどのコピー資料を用意してくだされた。これほど丁寧な他人の手助けをあおぐのは初めてだった。たくさん収穫があった。

相談した内容は、集団で読書をするこの可能性と実例、そして読書の効用、この二点だった。前者は新聞や雑誌の記事から取捨選択してコピーしてくださり、現在進行形の情報だった。後者は古典から最近までの考察例

を集めてくださった。さらに読書の効用と一口にいうけれど、「読書の毒」という視点もありますよと、両面合せて用意してくださった。

豊富な資料を手にして思ったのは、自分は本屋なのだが、本の文化的世界の総体に、職業人として広く関心を寄せていなかったという気づきだった。もう一つは、相談を受けての読書指導が非常に具体的だったということ。つまり、この本、この著者がいいというのでなく、ここに書かれている「情報」が参考になりますよという指導法で、「結論」をさしはさまないという姿勢に終始していた。

職業人としての読書に欠けているということの発見は、四十年本屋を営んできてはじめての気づきだった。本屋をはじめ前の一時期、本を間に据えた議論を仲間と熱心にしていた。自分では漠然と「思想」を求めていたつもりだった。あるとき「思想」を専門に大学で学んでいるという仲間に出会った。少しびっくりした。思想は生きているもの、どうして「学」として存在するのか不思議だった。よく聞けば、それは「思想史」だった。納得したが、それでも疑問は残った。わたしの育った地方は「かくれキリシタン」の殉教の街だった。「信」は個人の生死の狭間にあるものだった。大学生になって「神学」というものがあることを知って驚いた。この驚きが「思想」と

「思想史」の狭間にも存在した。アンガージュマン（参加）の時代だったのだ。

これは「具体と抽象」というカテゴリーの問題だといまは思う。人は生活圏を広くも狭くもできる。自分の信念も「具体と抽象」のグラデーションの中に定在するものだ。具体は殉教の方向だ。いろんな生き方があるのに、それでも狭い道へと引き寄せられる、そんな情動がたしかにある。

職業人としての読書は歴史意識を求められる。一方わたしは一回性の出来事にしか興味がもてない。概念的なものが好きなわりには、じつは具体性の「地べた」から離れられなかったようだ。

「毒になる読書」というのは、読めば読むほど「道が狭まる」ものだ。選んでもらった書物の中に石井洋二郎『毒書案内』飛鳥新社があった。自分では絶対に手にしない本だ。論でなく紹介だからだ。しかし的を射た本だった。読者を異端に導き、逃れがたいシンパシーへと引き寄せる本の数々の中に、『二十歳のエチュード』が挙げられてあった。これはわたしが十八のときに出合ったある年長者に贈られた本だった。ランボオにつながる失墜の美学をそこで知った。

多読の日々だけど、自分の視野の狭さをときに危うく思う。なぜ乱読してしまうのだろうか？ 現在進行形で気

二になる本は三冊ある。『八本脚の蝶』（二階堂奥歯）『読書という荒野』（見城徹）『三体』（劉慈欣）。いずれも狂気を孕んだ書物だ。一冊目の中で、『くいしんぼうのあおむしくん』を知った。食欲に世界を食べ尽くし、すべてが消滅する。そして消えたはずの世界は「あおむしくん」のお腹の中に、そのまま何一つ変わらず存在していた。この構造上、世界はあらかじめ疎外されたものとして現象するしかない。

二冊目の狂気は、世界でなく他者への熱愛として方向づけられているので、幸いこれまで裏切られることもなく、熱量が人の心へときちんと届く。

三冊目、『三体』事件の中核には『沈黙の春』がある。良いことだと思ったことが本当は害毒だったという話だ。そこから極論して、人類はそもそもが邪悪な存在だと、異星人に滅亡させる道を選ぶ。

シンポジウムは先送りになっているが、こんなわたしが人前で「読書の効用」を語ることは、そもそも不似合いなことだったのかもしれない。高橋司書はそんなことをメタレベルな選書で気づかせてくれた。

2020.04.24

二階堂奥歯『八本脚の蝶』河出文庫 2020

見城徹『読書という荒野』幻冬舎文庫 2020

劉慈欣『三体』早川書房 2019

槇ひろし・前川欣三『くいしんぼうのあおむしくん』福音館書店 2012

レーチェル・カーソン『沈黙の春』改訂版』新潮文庫 2004

・定有堂書店 店頭からのご案内

水原涼（文） 安田和弘（写真）

『震える虹彩』 2020

限定三〇〇部 五〇〇〇円 サイン入り

発行 岡田和奈佳＋水原涼＋安田和弘

水原涼『蹴爪（ボラン）』講談社 2018

通話

水原 涼

(作家)

春の連休が明けたばかりにしては暑い日だった。ビルの一階は冷房がよく利いていたが、分厚いデニム生地に含まれた下半身は蒸れている。汗はまったく引かない。

二〇一一年五月十日、私は新人賞の授賞式のために、主催誌の版元の本社ビルを訪れていた。受付を通るとそこは広いラウンジになっていて、壁際にバーカウンターがあり、足音のしないこげ茶の絨毯に低いテーブルや椅子が並んでいる。その一つに、私と編集者は座っていた。賞金の領収書を書き、授賞式の流れを確認して、あとは雑談をする。そのすこし前に、ドイツ・ブンデスリーグでボルシア・ドルトムントの優勝が決まったばかりだった。そのチームの主力の一人が日本人だったため、ドルトムントの優勝は日本でも大きく報じられていた。しかし編集者はサッカーにまったく興味がなく、私はたまたま締切と枚数がちょうどよかったというだけの理由で応募した新人賞の主催誌をぜんぜん読んでいない。いっこうに引かない汗に下半身をももぞさせながら、授賞式

が始まるまでの時間を、盛り上がらない会話で潰していた。

不意に尻ポケットに入れたスマホが震えた。取り出して見ると発信者は母だった。出ていいですよ、私はちょっと、これを持っていきますんで。席を立つタイミングを逃すまいとするように編集者は領収書を掲げて見せたが、私は首を振って、震えるスマホをそのままポケットにしまう。振動はほどなくして止まった。

授賞式のあと、トイレでスマホを見ると、母からのメールが届いていた。眠れませんでした、という書き出しの長いメールは機種変更を繰り返しているうちに消えてしまったが、内容は今でもよく憶えている。受賞作は、作者自身を思わせる語り手が鳥取の実家に帰省した一週間の出来事を描いたもので、父と姉が近親相姦してたり語り手が飼った猫の首を絞めたりと、親に依存して生活している学生が書くにはけしからん内容だった。母からのメールは、作品の感想というよりは、こんな作品を書いてしまった人間の家族として考えたこと、といった内容だった。そして、メールを書いている途中に私からの着信があり、しかし電話口からは「ごそごそいう音とくぐもった声しか聞こえなかった、いったいあなたは母に何を伝えたいのか、という、詰問のような文章で終わっていた。発信履歴を見てみるとたしかに、ラウンジで盛り上がり

ない会話をしていた時間に、私から母に電話をかけたことになってる。ズボンのなかで汗をかいていたせいで、尻と椅子の間で圧迫されたスマホが反応してしまったらしかった。

小説家の水原涼さんです、と私をはじめで紹介された日は、こんなふうだった。

人が小説家と呼ばれるようになるのにはいくつかのタイミングがある。新人賞の受賞を知らせる電話がきたとき、実際に自分の原稿の掲載誌が発売されたとき、あるいは、他の仕事をすべて辞め、専業作家として働きはじめたときだろうか。岡井隆はかつて、エッセイのなかでこう書いていた。

もしも歌人(短歌を作ることを無上の生き甲斐とし、そこに自己の存在理由を見いだしてゐる人)を(作家と呼ぶなら、(作家)は(成る)ものではなく、はじめから(作家)で(在る)もの、しかも長い間には(作家)でなかつたり、また、あつたりするものやうに考へられる。たとへば、今朝、この文章を書いてゐるわたしは、(作家(歌人))ではない。十七歳の時(四十九年前)、秋雨によつて増水した家の前の小川の水位を見ながら手帖に歌を書きつけてゐた時の自分は(作

家)であつた。 i

友人とフットサルをしているとき、夕食の下拵えにマネギを炒めているとき、私は小説家としてそうしているのではない。しかし小説は小説家——(作家)として書く。もちろん、授賞式で喋つたり、ズボンのなかでスマホを誤作動させたりしているときの私は小説家ではなかつた。今この文章を書いている私はどうだろう。

奈良さんから新人賞について書いてほしい、という依頼を受けて私が思い出したのは、スマホの誤作動のことだつた。編集者からは次の作品を急かされていたが、書いたものは没つづきで、けっきょく私が二作目を発表するまでに四年半がかつた。その四年半の間、私が小説家だつたことは、どのくらいあつただろう。コンスタントに作品を発表できるようになり、単行本を上梓した今でも、誰かに職業を訊かれれば小説家と答えはするが、週五日働いているフリーターとしての自意識のほうが強い。今でも作家になろうとしている、という話を、私は去年の秋に出た **NINE** に書いたのだが、その思いは変わってはいない。

受賞した小説を書いたのは前年の十二月だ。もちろん、その小説を新人賞に応募したのは紛れもなく私で、応募したからにはその作品は、五月の受賞作掲載号に載るは

ずだ、という確信があったのも間違いない。でも、半
ちかく前に作品を書いたときは、そんなことはぜんぜん
考えていなかった。小説を書くこととそれが受賞するの
はまったく違うことで、新人賞について考えるとき、
私は、結果的に受賞作になった小説のことをあまり考え
ない。

その小説を私は甲府で書いた。私は当時札幌に住んで
いたが、十二月五日に開催された文学フリマのために東
京を訪れていた。しかし文学フリマで散財しすぎて、ク
レジットカードも持っていなかった私の手元には、札幌
に戻るための交通費すら残っていなかった。それで、奨
学金が振り込まれるまでの十日ほどを、当時山梨大学に
通っていた友人の家に居候して過ごしていたのだ。

彼は毎日、朝食のあとすぐに出かけ、実験やバイトを
終えて家に帰るのは冬の早い陽が沈んでからだった。甲
府までの電車賃で所持金を使い果たした私は、銀行から
小銭もぜんぶ引き出したのに手元には数百円しかない。
友人の部屋の蔵書はあまり好みに合わなかったし、文学
フリマで買った本も、飛行機代が残っていないと分かっ
たときに、荷物を減らすために札幌の自宅に送ってしまっ
た（もちろん着払いで、配達日は奨学金の振込日よりあと、
規定の許すかぎり遠い日付に設定した）。振込までの日々

を過ごしあぐね、私はなけなしの数百円で、友人の大学
の生協で原稿用紙を買った。そして小説を書きはじめた。
友人が出かけてから帰ってくるまで、私は窓辺の炬燵
に座ってもくもくと書きつづけた。友人が帰ってきたら
十数円きり入っていない財布を見せて夕食をせびり、彼
と一緒にテレビゲームをした。一週間ほどそれを繰り返
しているうちに奨学金は振り込まれ、百枚ほどの小説も
完成していた。

その小説を書きながら、自分が何を考えていたのかは
憶えていない。でも、新人賞のことではなかったことだ
けは確かだ。サッカークラブは営利企業で、収益を最大
化することが目的だ。リーグで優勝するのはその手段の
ひとつだ。優勝すれば賞金が入る。強いチームのグッズ
はよく売れるしスポンサーもつきやすい。各国リーグの
上位チームだけが参加できる大会もある。だからどのチー
ムも、すこしでも上の順位でシーズンを終えることを最
大の目標に戦っている。個々の選手たちももちろん、誰
かに問われれば、優勝を目指している、と言うだろう。
しかし実際にボールを追いかけながら、彼らはたぶん、
優勝することなど考えない。ただ目の前のボールを敵の
ゴールに入れるために何をするのが適切かだけを考えて
いるはずだ。そのために脳のリソースを使い切っている

のだから、長いシーズンが終わったときのことなんて考
える余裕はない。それでも、一つ一つのゴールを目指し
て必死に身体を動かした結果として、彼らは優勝したり
しなかったりする。小説もそれと同じだ。私たちは目の
前にある何がなんだかわからないものを文章に落とし込
むのに必死で、その作品が受賞するかどうかなんて考え
る余裕はない。そして私たち書き手の一人一人は営利企
業ではないのだから、収益を追い求める必要はなく、受
賞する必要もない。

いやしくも文学を天職と考えるほどの人なら、自分
の苦勞が本当に報われるのは書くという行為だと考え、
書いたものから生じる結果など気かけないはずで
す。(…)作家にとって書くという行為が一番いい生き方
であり、書いたものを通して得られる社会的、政治的、
あるいは経済的な結果などどうでもいいと考えている
からなのです。 ii

バルガス・リョサはこう書いていた。もちろん、小説
は、受賞しないより受賞したほうが多くの人に届くだろ
う。でもそれはついでのことで、私が小説を書いたのは
小説を書くためだ。

新人賞を受賞するのは賞に値する小説だけだが、その
小説は必ずしも新人賞のために書かれたものではない。
私は母と連絡をとるつもりもなかったし、小説を新人
賞に応募するつもりもなかった。しかし私は私への長い
メールを書いている母に電話をかけてしまい、書き上がった
小説を新人賞に応募した。母は私の電話に出なかった
が、私の小説は新人賞を与えられた。私は受賞から四年
半も口ごもっていたが、今はぼつぼつと喋れるようになった。
また言葉に詰まることもあるかもしれないし、受話
器の向こうにいる人が、私の話に聞き飽きて電話を切っ
てしまうかもしれない。私は饒舌に話しつづけられるか
もしれないし、電話の相手は、私が死んでからもずっと
私の話に耳を傾けてくれるかもしれない。そもそも受話
器の向こうには誰もいないかもしれない。

i 岡井隆「作家は〈成る〉ものではなく、はじめから
〈在る〉もの」(『リテール』メタログ社、一九九
四年春号、一〇四ページ)

ii マリオ・バルガス・リョサ『若い小説家に宛てた手
紙』新潮社、二〇〇〇年、八ページ

独り遊びの愉しみ

定有堂倉吉支店 その⑤

萩原 俊郎 (倉吉市在住者)

「独り遊びの愉しみ」というと、なにやらオタク的な匂いで敬遠されがちだったが、コロナ禍による外出自粛で、今や「宅遊び」は堂々と大手を振って遊べる時代になった。

長かった単身赴任暮らし、さまざま「宅遊び」を愉しんできた。その一端を恥ずかしながら公開し、「家の中で一体なにをすれば!」と途方に暮れている「遊び難民」の方々の一助になれば幸いである。ただし、そのままズルズルと一生はまってしまう可能性があるのです、よくよく吟味して。

① 孤独な空の旅ーフライト・シミュレーション

マイクロソフト社の「フライト・シミュレーション(FS)」シリーズが有名。「パイロット」として。パソコン上で飛行機を飛ばす、まことに孤独なオタ・ゲーである。

数年前、航空自衛隊の美保基地を見学した際、C-1ジェット輸送機の操縦桿を握る機会があった。FSの世界ではC-1で同基地を何度も離発着し、境水道大橋の下もくぐり抜けている(本当にやったらエライことだが)。計器類も分かるので、目の前

のエンジン始動ボタンを押ししたい衝動をこらえるのに苦労した。実際、かつて「オレに操縦させろ」と旅客機の機長を襲ったFSマニアもいる。

全世界に数百万の愛好者がいると言われ、思わぬところで「同好の士」に出会うことも多い。うちの新聞社のボスもその一人で、「何もない太平洋上をひたすら飛ぶハワイ航路には往生した」という。「パソコンの前で変な棒(操縦桿)ジョイスティックを握ってじっとしてるなら、家の手伝いでもして!」と、だいたい奥さんから文句を言われる。

②「もとよりわれ生還を期せず」コンバット・フライトシミュレーション、さらに戦車、潜水艦の世界

FSから派生したのが、やはりマイクロソフト社のコンバット・フライトシミュレーション(CFS)。機銃や爆弾を携えて戦場に赴き、空中戦や空母を沈めたりする、かなりアブナイ趣味だ。

CFS 1(欧州戦線) 2(太平洋戦争) 3(再び欧州)があり、世界中のマニアが戦闘機、爆撃機、さらに戦艦・空母などの艦艇や基地、戦場まで制作してネットで無料提供しているのです、第一次大戦の複葉機から第二次大戦、朝鮮・ベトナム・湾岸戦争まで、すべてパソコン上で追体験することができます。

「萩原兵曹、もとより生還を期せず」。小声でつぶやきながら空母赤城から九九艦爆で真珠湾に向かったり、ハリケーンでドーバー海峡を渡ってくる独爆撃機を迎え撃つのだが、毎回あ

えなく撃墜される。やるたびに、本当の戦争なんか絶対起きて欲しくない、飛行兵だけにはならないでござい、と思うはずである。

さらにタイガー、T34などで独ソ戦を戦う「戦車もの」、大西洋の海面下でUボートを操る「潜水艦もの」など、この世界は多彩で深い、決して「好戦主義者」ではないので誤解のないように。

③進化し過ぎて愛好者が減ったーPSグランツーリスモ

テレビの前のこたつに、小さなハンドルが固定してあったら、まず間違いない、この愛好者だ(ちよつと恥ずかしい風景なので、あまり人には見せないうが)。プレーステーションの「グランツーリスモ(GT)」シリーズ。サーキットの路面のデコボコまで拾うリアルさ、光る車体、大都市の公道レースやラリーまで体験できるとあつて十数年前、一気に愛好者が増えた。「昨晚、ニユルブルクリンク(ドイツの名門コース)で×分を切つてさあ…」。社内でも自慢する輩が相次いだのもこの頃である。

GT4、5、6…と難易度とリアルさ(他車や壁にぶつかったダメージまで再現)に磨きをかけたが、愛好者は減つていった。マニアしか付いていけず、一般の愛好者が置いてきぼりを食つたのだ。

それでも、家での飲み会で引つ張り出して久々に走ると、みんな大いに盛り上がる。なんといつても「飲酒運転OK」だから。

④くれぐれも家の中限定ーエアコッキングガンじり

これはむしろ「外はダメ、家の中だけで楽しんで下さい」という趣味。大阪での単身赴任時代、日本橋でなんの気なしに千円ほどのエアコッキングガン(昔の銀玉鉄砲の進化したやつ)を買つたら、見事にはまった。コルトにベレッタ、ルガーにワルサー…とヤフオクで買い集め、もう少しリアルにと塗装もして、五十数丁の「世界の拳銃コレクション」が完成した。主にプリンキング(宅内射的)を愉しむが、これだけ大量の拳銃、「警察に踏み込まれたら、ちよつとまずいか」。まあ、踏み込まれるようなことは何もしていないけど。BB弾の初速規制さえ守れば、全く合法です。

…こうして見ると、「男の子は飛行機、クルマ、鉄砲」つて、本当だな。還暦にもなつて、全然成長していない。これらの独り遊びはわずかな初期投資だけで(中古ソフトやジョイスティックなど)、家計に迷惑をかけない。さらに航空機、自動車、拳銃など各分野の知識が生半可でなくなる。

一方、子供は喜ぶが、奥さんの支持を得るのはまず絶望的な趣味ばかりなので、熱中し過ぎると「朝から晩まで、いい加減にして!」ということになる。今流行りの「コロナ離婚」に発展しないよう気をつけながら愉しんでいただきたい。

音信不通の先で会いましょう

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

大いなるバグが発生した。

いまや、世界中が新型コロナウイルスによって大混乱である。バグりまくりである。

バグが起きると、プログラムを「正常化」させるために、あれやこれやの希望が謳われる。収束したら経済を元に戻そう、オリンピックは来夏にやろう、落ち着いたらまた会おう。

たしかに、私たちは希望によって活かされている。希望がなければ、どうして未明の先を生きていくことができようか。

ただ、「過去の懐かしい景色を復元する」というニュアンスに基づくかれた希望、いわゆるノスタルジアは、果たしてこの混乱の現状に適したものなのか、なんだか疑わしく思ってしまうのも事実である。

世界は、変容を常としている。不安定を常態としてその有様を形成し続けている。つまりバグが起きること

この世界にとっては平時のことなのである。だとすれば、ここで私たちがやるべきことは、過去の景色に普遍を求めることではなく、自己の行動や思考に変化をもたらし、新たな平時に向き合うことなのではないか。世界が激しくバグり続けるのなら、私たちがまた、劇的なバグを起こし続けながら、未明を迎え入れなければならないのではないか。そんな懐疑が、頭を巡る。

ノスタルジアに捉われず、変動の値に満ちた未来を探索するための新しい航海図を獲得する。それこそが現状の丈に見合った希望である気がしてならない。

新たな「希望」を描く時、アイテムとして有効なのは「絶望」である。

それまでに浮かべていた望みを絶つ。それはつまり、過去の幻想を断絶するということだ。すると、はじめて明日に実地的な「希望」が明らかになったりする。絶望をインストールすることで、ようやく現実在即した希望は再構築されるのである。

いま、東京にいる。

3月の中旬まで鳥取にいて、それから仕事の都合で東京へと移動した。4月の半ばにはまた鳥取へと戻る予定だったのだが、あれよあれよと移動に圧がかかり、そうして私は東京に閉じ込められ、トットリ界限との断絶を余儀なくされる身となった。

お元気ですか、と声をかけたい人たちが、鳥取にはたくさんいる。ご無沙汰しております、こちらは東京の小さなマンションの一室で、ベランダの菜園を眺めるなどしながら、原稿をしたためる毎日です。年内に予定していたライブ仕事はすべて中止や延期となり、今年の収入見込みは絶望的です。出版業界も書店や印刷所が停止の兆しを見せ、暗雲が立ち込め始めています。そちらのお加減は、いかがですか。

本当は、直接会って、声をかけたい。鳥取に戻って、あの人やこの人と会話を交わしたい。Zoomや電話でなく、対面の温度で、鳥取と関わりたい。

しかし、そんな望みは現状、ノスタルジーでしかない。すでに世界は変容し、私とトットリ界限は「音信不通」の間柄に身を置くことになってしまったのだ。

だとすれば、私がいまやるべきことは、絶望である。

絶望し、そしてトットリ界限との接続点を、新たに生成しなくてはならない。

東京でも鳥取でも、これからさらにたくさんのバグが起きるだろう。そしてそのバグは、固着化し、そしてまた新たなバグを招いたりすることだろう。変化に変化を重ねながら、それでも世界は正常然として続いていく。私たちはその世界にまっとうに付き合うために、まっとうにバグり続けなければならない。私の二拠点生活にも

バグが発生してしまったのだから、私は自身にバグを起こすことで、これからの鳥取へのアクセス方法に変容を加える必要がある。「音信不通」の状態から、どのように鳥取へハッキングすればいいのか、バグを起こして、それを明らかにしていくことが、これからの個人的課題となるのである。

世界同時鎖国という、歴史に残る日々を私たちは生きている。目に見えないベルリンの壁が、いきなりにして、縦横無尽に張り巡らされてしまったのだ。それはつまり、世界が一斉に「音信不通」のゾーンへと突入を始めた、ということでもある。この「音信不通」の先で、そして分断の時代の先で、あなたと再会できる日を、私はとても楽しみにしている。その日を迎えるために、私は今日も涙をこらえながら、小さくバグり続けている。

いっしょに歩く日記

鳥居 貴彦

(開風社待賢フックセンター)

保育園から手紙が来た。自宅で仕事をしている人は自粛してください、というようなことが書かれていた。硬い文章は人を不安にさせる。まあしかたない、そう思うしかない。

急にこどもと歩く日々がはじまった。

定休日。片付けるべきことは山ほどあるが見ないことにして散歩に出ることにする。外に出るとすぐ「バスみにいく」とかいう。すぐその大きな通りまで歩く。途中で、歯医者さんの門ががらと開きNちゃんとかパパが出てきた。おーいと手をふる。出かけるところないねえ。御所いくのが日課になってるんですよ。そうかひろいもんねー。人多いけどね。ばいばいと手を振って自転車に乗る二人を見送る。

営業日。今日からしばらく店を開めることにした。なぜかは自分でもわからない。

朝、郵便局に荷物を出しに行く。ちいさな局の中には人が5、6人いた。せまい。急に「だっこ」と言い出す。しかたないので周りの目を気にしながらカウンターに座らせ料金など払う。恰幅のいい局長がにこやかに「いくつ?」ときく。お菓子あげるねー、とどこからかカゴに入った駄菓子が出てきた。ばいばーいと盛大に見送ってもらおう。そのままコンビニへ。公共料金の支払い。若いバイトくんのなんでもない対応に意味もなくぼかーんとしてしまう。なんとなく開店時間の11時には帰ってきてしまった。Closeの看板をドアにかけて中で作業することにする。店がせまいのでマガジンラックを外に出すしかない。ただ外に出すのもあれなんでホウキで店の前をかく。けつきよくやっていることはいつもと変わらない。やることにしていた作業はまったく進まないまま二人でぼんやり店の前のベンチに座っていると一日が終わった。

今日は14時にOさんがくる。昼ごはんを食べたら寝るのではないか。寝ててくれ。寝かしつけのコツは自分が先に寝ることだと信じている。信じていたら叶った。Oさんとオンラインの可能性についてなんやかんや話す。Wさんが取り置きの本を取りに来てくれた。外で立ち話

配達システムの可能性について。にぎやか。「さっきお子さん起きてきてましたよ」と中で待っていたOさんが静かにいう。え。半開きの戸をそつと覗くと暗い部屋の端っこで静かに独りミッフィーの絵本を開いていた。泣くとかしないのね。

ヤマトの集配センターに行く。「バイクでいく」と言うので三輪車を出してきた。バイクちやうけどな。なんどペダルに足をおいてもこげない。地面をけつて前に進む。大人の足で2分の距離を30分かけて進む。いつのまにか「ちよつとまってねー」という言葉を覚えたらしい。生きる知恵。案の定とちゆうで「だっこ」といいだした。12キロの2歳児と三輪車と宅急便に出す荷物。手に負えない。

Tくんが路地の入り口からのぞいている。近づいたり近づかなかつたりする変な距離。空き地でぐるぐるまわりはじめた。追いかけているわけではない。ただぐるぐるまわっている。ただそれを眺めている。こけたら痛い。

また定休日。定休日って自分に言い聞かせないとわからなくなる。午前中は庭でドライアイスにじゃあじゃああ

水をかける。もくもくでるけむりがちよつと怖い。逃げる。水かける。怖い。逃げる。10回くりかえしても飽きない。昼を食わせて、外へ。荷物を運ぶお仕事。どうしても長靴が履きたいと言う人と、自転車の後ろの席で爆睡する人。ついなら当然のように右の長靴は無くなっていた。どこで落としたんや。安モンやけどややへこむ。本人もやや傾いている。あとで一緒にさがそな。「おいしいもんだべよか」ときくと「ゲーキ！」と元気良く返事が返ってきた。

ついに今日が営業日なのか定休日なのかわからなくなつた。郵便局へ。途中長屋の解体現場に遭遇ししばらく見とれる。だが父には12時に水野くんが来るという用事があるのだ。すまん。突然訪れたシヨベルカーとの別れに号泣する子を右手で抱き、左手には三輪車、さらにもう一本の手で払込用紙を持ち、残ったもう一本の手でATMを操作する。口座の残高は見えない。

八代日記

(二)

齊藤仁昭

(元長崎書店)

四月某日

長崎次郎書店へ手伝いに向かう。少し街外れにある長崎次郎書店の方はお客さんが増えているようだ。近所に住んではいるが、いままで来ていなかった方が多いように感じた。街中の長崎書店の方は客数が減っているとのこと。コロナ禍で生活習慣が変わるだろうか。

自粛自粛で個人で店をやっている友人・知人の店や世話になった各地のライブハウスが苦境に陥っている。テイクアウトや通販などを利用したのだが、個人では焼け石に水だ。行政の保障が少なすぎるし遅すぎる。諸外国の行政がうらやましい。

もはややしているところに熊本市が家賃支援事業をアナウンス。熊本のライブハウスでは活用できそうとのこと。熊本市長は元バンドマン。うまくいきますよう。

四月某日

八代市はまだ陽性患者が出ておらず、のんびりしているように見えるが、保育園からはできるだけ登園を自粛してくださいと通知があった。

四月某日

この二週間が山場つてのを何度聞いたかわからない。姪っ子の小学校の入学式があるんだかないんだかわからなくてかわいそうだなあと思っていたが、自分もこんな状況なので東京に行くことができないのであった。まさかバンドで集まらないことになるとは思っていなかった。なので、不安になる。サラリーマン仕事だけで精神的な安定を保てるのだろうか。

四月某日

段々とパプリカに慣れてきてむしろ好きなんじゃないかという気になってきた。ベースラインが素晴らしい。子どもは一日に何十回と聴いても飽きないようだ。どこにそういう魅力があるのか気になる。

頭いてえな 散歩してえな

午前二時過ぎ 風のぬるい夜は
曲がりくねる細い道

空を見上げる宿無し追い越して
どこへ行こう どこでもいい
午前二時過ぎ 風のぬるい夜は

漫画のように 走りだそうぜ

午前二時過ぎ 風のぬるい夜は
息を切らず長い冬

汚れた河を左に見下ろして
なんでもいい 歌いだそう

真夜中過ぎのこだまを散らして
もう すぐに 終わる

ナイーブがなんだ スターブがどうした

鍵をかけて 誰も入れない夜は
思い返す悪い夢

いつかの顔も去らずに笑いだす
もういいだろう 忘れ去ろう

テレビは最後の言葉も言わずに消える

投げ出してえな 逃げ出してえな

寒いし眠いしだるいしあちこち痛い

ふくらんでは消えてゆく
塞ぎの虫を横に追いやって

どうしようか どうでもいい
おはよう さよなら ありがとう ごめんね またね

恋はリズム 弾むリズム

あなたの言葉で今夜もどこかを歩く
逃げ出しそうなこの夜を

つかんでどこへも行かせはしないのさ
腕を振ろう 少しだけ

午前二時過ぎ 風のぬるい夜は

幸か不幸か 俺に聞くな

見つめてごらんよ 二人の鞆の中を
余りものの優しさを

残さず集めてもう一度朝を待つ
なんでもいい 歌いだそう

真夜中過ぎのこだまを散らして
もう すぐに 終わる

(ケバブジョンソン「風のぬるい夜」 作詞：杉浦真寛)

風と星と雲と

ムラカミ ヒロシ

（フライング・ブックマン）

わが国で最初の、インフルエンザと目される感冒の流行は平安時代に遡る。『三代実録』の貞観五（八六三）年一月二七日の項に、「去年の冬から、京及び畿内畿外で咳逆を患う者が多く、死者が甚だ多い」という趣旨の記述がある。

その後も、流行性の感冒は、『日本紀略』『大鏡』『吾妻鏡』『明月記』『増鏡』等々に、「咳病」「シワブキ病」などの名前で現れる。江戸時代になると、文献も多いことから、頻繁かつ詳細になり、名称も、「谷風」「お駒風」「お七風」「薩摩風」「アメリカ風」などと呼ばれ、明治に入っても、「お染風」というのがある。

ちょっと気になったのは、「稲葉風」というのが明和六（一七六九）年に流行っていることで、南畝の『一話一言』に「十月、此節大に風流行、家毎に病まざるもの

なし、世俗稲葉風といふ」なる一節がある。『武江年表』にも、「貴賤患はざるはなし。大家にては薬を手桶に入れて運び、下部に与ふる程のことなりし」とある。玄白も『後見草』で、家々の台所で煎じ薬を作っては荷桶や手桶で配って回った、という大変な有様を書き留めている。

「谷風」は力士の名に、「お駒風」は悪女・お駒に、「お七風」は八百屋お七に、それぞれ因んだことが知られている。「薩摩風」「アメリカ風」は、感染源と目された地名に拠っている。然るに、「稲葉風」は来歴が詳らかでない。発生地を用いるのは、「薩摩風」（享和二年）以降のようで、明和六年の「稲葉風」は少々早い。そもそも「稲葉」であって「因幡」ではないので、恐らく人名（四股名にありそうである）か季節（稲の葉が茂る頃）由来ではないかと思う。

そこで、『鳥府敵秘録』を見ると、同年九月二十七日の項に「此比（このころ）風邪大に流行月を逾（こえ）て止まず」という簡潔な記述が、たった一行ある。

ただ、面白いことに、この年は天変が多く、三件も記録されている。即ち「八月大上旬 三更に及ひ東方に客星現はる世気数十丈西を指す」「九月二十日 未刻日輪に鶏卵程の大きさの物現はる」「十月大二日 暮夜西方に

客星現はる初秋見えたるよりは紅氣稍薄し」である。客星は彗星のこと。メシエが発見した大彗星と思われる。九月の日輪云々は、惑星の日面通過であろう。

事のついでに、翌年の記事を見ると、六月大上旬に客星、七月に炎気雲を焼く（霜焼）とある。前者はレクセル彗星、後者はオーロラである。この年のオーロラは、日本各地で目撃され、多くの文献に書き残された。

わざわざ、彗星やオーロラを持ち出したのは、これらが凶兆とされる俗信があったからである。欧州にあっても、それは同様で、星の運行が、作物の出来不出来や、病気の流行に関わっていると考えられた。暦が占星術師によつて作られていたのは、そういう訳である。あのノストラダムスも、このような生業の占星術師であった。十六世紀の英国で、初めて「インフルエンザ」の言葉が用いられた際、ラテン語の「インフルエンティアコレリ」（星の影響の意）に依拠したのは当然の成り行きであつたろう。

固有名詞を冠したインフルエンザで有名なのは、約百年前、世界中で猖獗を極めた「スペイン風邪」であろう。時あたかも第一次世界大戦下で交戦国が報道管制を敷く

中、中立国スペインが、正直に公表を続けたために不名誉な名前を付けられることになったと聞く。

わが国においても、この病禍は凄まじく、総人口五千万の内、実に患者数は二千四百万に迫り、死者は三十八万八千の多きに達した。わが県に関して言えば、人口四十七万六千にあつて、患者数二十一万、死者四千人を数えた。どれほどの災厄であつたかが分かるうと言ふものである。

当時から、既に、マスク、含嗽（うがい）、ワクチンが有効であるとの知見があり、例えば、当県では、手本を示してマスクの自家調製を奨励、警察署では簡易マスクを大量に作り、派出所で廉価販売した。また、劇場や活動写真館などでは、興行主が客に無料配布したという。以て、マスクは当県の「山間僻地」に至るまで普及した。一方、うがいは手間が掛かる故に、知識階級にしか普及しなかつたそうである。

以上は、内務省衛生局編『流行性感冒』（大正十一年刊）に拠つた。

パスハ

山本 千津子

(KOHKA コーシカ)



午後、パソコンを開いた。メールが一通。ウラジオストクの知人からだった。添付の写真を開いてみると、鮮やかに色付けされたいくつものゆで卵とクリーチがテーブルの上に。そうか、今日はロシアでは、ロシア正教会のパスハ（復活祭）を祝っているんだ。

四月一九日、日曜日、朝八時に散歩に出かけた。レンゲ畑やすでに耕された田、野菜畑、それぞれの家の庭先にはチューリップ。あぜ道ばかりでなく車道脇の歩道も歩く。えっ？今日は車が通らない、人も見ない。三十分間に目にした車は十台もなかった。目にした人は二人だった。平日は数分おきに四、五台が進んでくるし、ウオーキングや犬の散歩をしている十人ぐらいと挨拶を交わす。散歩を始めてまだ十日しかたっていないのだが、こんなに人の気配がないとなると「私は一人で何をしているのだろうか？」と、身体を動かして心も軽くなるはずが、なぜか気持ち沈んでいく。皆、家から出ないのか？いつもより早く家に帰った。

ウラジオストクに住んで間もない頃、パン屋さんで売っているケーキのようなパン、なぜかこの時期しか売っていないくて不思議に思っていた。次はいっ現れるのだろうかと待っていたら、一年後。それもそのはず、復活祭にのみ食する特別なパン、クリーチだったのだ。そして、この日に「ハリストス・ヴォスクレース（キリストの復活）！」とロシア人から言われた私は、同じように繰り返した。「メリー・クリスマス」には「メリー・クリスマス」、「明けましておめでとう」には「明けましておめでとう」と返すように。でも大きく違っていた。あなたが言うべきは、と教えられたのが「ヴァイスチヌ・ヴァスクレース（まことに復活）！」何度かリハーサルを繰り返して、本番。上手く言えた。パスハにかわす特別な挨拶。私はすっかり気に入って、何とかロシア人よりも先に言おうと思ひ、暗記してから知人を訪ねて行った。呼びかけに応えてもらった嬉しき。信者でなくてもただキリストの復活を祝福し合う喜び。教会では司祭の

「ハリストス・ヴォスクレース！」に信者が応え、信者同士でも交わすこのことば。本来なら、今日、ロシアでは信者さんたちが教会に集まり、礼拝に参列し、何度も声に出しているところを今年は自宅で一人、または家族とのみに限られているのだ。

インターネットでロシアのテレビのサイトを開いてみた。公邸から復活祭の祝辞を述べるプーチン大統領。テーブルの上にはもちろん色付け卵とクリーチ、お茶のセット。暖炉を背にゆったりとしたソファーに座っているプーチン大統領は、犬を撫でているのでもなく、お茶を飲んでいるわけでもなく、本を読んだりテレビを見ているのではなく、テレビの前の私たちに真正面から呼び掛けている。教会へ行けない気持ちと皆と共有し、新型コロナ感染の現状について大統領の口から「ロシアにはこの困難を乗り越えるだけの国力がある。国内にはすべてある。経済も科学も医療も十分対応できる」との力強い言葉が発せられると信じてしまう。また、ニュース番組ではマスク、防護服、人工呼吸器等の製造ラインが映され、そこで働く人々が「三交替で休みなく働いている」とインタビュアーに答えている姿を見ると、国はちゃんと機能している、一生懸命に専門分野で頑張っている人々を信頼し任せて、私たちは言われる通り家にいようという気持ち

ちになる。実際には通行許可証が必要だったり、罰金が科せられたりしているけれど。

さあ、明日から仕事。時短になった高齢者支援。買い物だけ、掃除だけを素早く終えて話はしないで帰るようにと上司からの命令。本当は会話を一番の楽しみにしておられるのに。防護エプロン、マスク、手袋、消毒液を持って、感染源になってはいけないという意識を強く持つて。感染しているかもしれない私、検査で陽性の人と陰性の人、テレワークができる人とできない人、仕事を失った人と仕事量が増えた人、支援金がもらえる人ともらえない人、これほど自分と他人とを比べることになるとは、そして感染者ではないかと疑いの目で人を見るようになるとは……

神の下ではみな平等、あなたは私で私はあなた、遅かれ早かれ経済的に倒れるか、感染して倒れるか、心を病んで倒れるか、自分の番に回ってくるまでの時間に何ができるのだろう。来年は私から先に「ハリストス・ヴォスクレース！」とメールを送りたい。

鳥取あれこれ その四十五

内田克彦

(地域研究家)

河越照子については、過去三回取り上げた。たまたま『日本の百年 第6巻』を見ていたら「職業婦人の進出」の項に、「女性各界草分け年表」が掲載されており、「新聞記者 1897 (明治30年) 川越照子」とあった。出典とされる1938年7月1日付東京朝日新聞社発行の『躍進五十年』を見ても、「女の街頭進出元祖草分け調べ」の見出しの下に、同じ記述があるだけであった。

この春、NHKBSで朝ドラ『はね駒 (こんま)』の再放送が始まり、斉藤由貴演ずる橘りんのモデルは磯村春子で、彼女は一九〇五年に『報知新聞』記者になっていることもあり、この際、詳しく調べてみることにした。

まず、一九八五年刊行の江刺昭子著『女のくせに 草分けの女性新聞記者 (ジャーナリスト) たち』に当たった。そこに引用されていた、『報知新聞』に一九八八(明治二十一)年から五〇年間つとめた福良虎雄が一九三九年に刊行した『新聞記者生活五十年』を見ると、「日本最初の婦人記者」の項で、次のように記してあった。

私の記憶してゐるところでは、我國の新聞社で初めて婦人記者を採用したのは、明治三十年頃であつたと思つてゐる。最初萬朝報が婦人を記者に用ひたが、次で報知新聞社でも川越てる子と云ふ人を採用した。この人はキリスト教信者であつて、他の同僚との折合ひが悪いために間もなく退社して萬朝報に移つた。其の後へ入社したのが現在「婦人の友」を主宰してゐる羽仁もと子女史であつた。(略) そもそも報知新聞社で羽仁もと子女史を婦人記者に採用することを提議したのは私であつた。

これによると、一八九七年頃に『萬朝報』に未詳の女性記者がいたが、女性記者としては彼女に次いで照子が『報知新聞』に採用されたのち『萬朝報』に移つたこと、羽仁(当時は松岡姓)もと子は照子が『報知新聞』を退社した後に入社したことになる。

しかし、もと子は一九二八年刊行の自伝『半生を語る』で「はじめての女新聞記者」と書き、『報知新聞』初出記事は一九九年八月六付けの「子爵夫人谷くま子」であり、『報知新聞百二十年史』(一九九三年刊)では、明治31年12月の項に「職業案内の校正係募集を見て羽仁もと子(旧姓松岡)が入社、のちに三木善八社主に望

まれて記者となる。日本初の婦人記者といわれる」と記している。

江刺著では、二人のうちいずれが先か「いろいろ資料にあたってみたが、どうもはっきりしなかった」とあり、別に新たな人物として、徳富蘇峰による創刊後間もない『国民新聞』の一八九〇年二月二六日付けの「竹村女史」の筆名で書いた、竹越与三郎の妻である竹越(旧姓中村)竹代を「最初の女性記者」として見出ししている。

これに対して、一九八七年刊行の田中浩編『近代日本のジャーナリスト』の「明治期の女性ジャーナリスト」の項で、志村章子は次のとおり、もと子にこだわっている。

竹代の場合、事実上の「記者一号」とはいえ、自らの一〇〇%の意志で記者の道を選んだとはいえない。

(略)もと子が女性新聞記者一号といえるのは、男社会であった商業新聞なんのコネももたず実力を男たち認めさせて入社し、職業人として独立独歩で記者になり、その初志を一生貫き通したということである。

志村のこの考えに立つと、照子かもと子のいずれが先

かを見極めたくなくなる。その参考となるのは、照子が『萬朝報』に載せた一九〇二年四月一八日付けの「入社」の辞である。

未ださる人ありとは聞かざりしも、婦人新聞記者てふ称(となへ)のフト耳に響きし時より、食指動くことやらの思せられしが、みづから其人たり得んとは、かけても思はざりき、然るに昨年(の)末、ある人の勸により図らずも、操觚者(そうこしや)の末に列(つらなる)身となりしは、うき世の風の吹廻しとも謂ふべからんか、同じ記者たる程ならば、あはれ模範新聞の名かまびすしき、萬朝報に入らばやとの念また萌し、人の紹介を得て、其を主宰せる人に見え、思ふ所を打明けしに、四ヶ月を経にしけふ、入社(の)道開けしとて迎へられぬ、担任は婦人部なりとぞ

照子のこの記述によれば、一九〇一年の年末に操觚者〔筆者注 記者のこと〕として新聞社に入っており、それが『報知新聞』であったとすれば、前述の福良の記述は記憶違いによるもので、残念ながらもと子の後に照子が記者となったことになる。

秦阜梅林 (やすおかばいりん)

(楽人)

6

姉妹作『死と乙女』で再び、死神と若者の厳肅な対話(『魔王』の劇的な其れとはうってかわった『静劇風の』抒情)に若さ・儂い夢や明日への希望と、死の絶対的尊厳を明示。強烈なバロック的コントラストに依って同じ時代を生きたベートホーフエンの手法とは全く異なる、ロマン派の地平線を垣間見せた、見事に。

此の歌を基とした二短調の弦楽四重奏曲では、更に様々な表現を試み逞しひ創意工夫を。そんな彼一流のロマンテイクが多くの後輩達に與へた影響は実に絶大。慕ひ続ひた者はD.ドゥヴオルジャーク、チャイコフスキー、マーラー※1、ヴォルフ、R.シュトラウス、ラフマーニノフ、クリムト、E.シレー、セガンティーニにシベリウス…。其の罇は20世紀を跨ひで現代へと繋がってゐて音楽に限らずジャンルを超へ響いてゆく。

7

顕著な例として次世代であるブルックナー、更に後のマーラー。此の2人『共にヴィーンを舞台に活躍し、ヴァグナーの影響の濃い後期ロマン派、編成の大きく長大な交響曲と歌曲を作曲した』以外は殆ど類似点の無い、並べやうのない非対象的な人物※2なのだが不思議な事に、シューベルトには『どちらも酷似してゐて』シューベルトとブルックナー或るひは、シューベルトとマーラーとなるとどれ程紙数を費しても語り尽くす事は決してないだらう。

其れ程、両者共に先輩シューベルトには実に多くを負つてゐて前者であれば? 例えばこんな風…

8

シューベルト、ブルックナー共に一曲ずつ遺した弦楽五重奏曲※3。編成は少し違ふが此の二曲のみでプログラムされた『五重奏の夕べ』を考へてみよう。此れ程理想的なものが他に考へられやうか? 然も大層簡単に催される。つまり或る弦楽四重奏団の定期演奏会に前者ならばチェリスト、後者にヴィオリスト。2人の弦楽奏者(のゲスト)を迎へるだけ。

此の二曲なら？ 僕はまう、前の曲の続きを聴ひてゐるやうな錯覚にさへ陥つて了ふ。2人は、音楽的な背景（対位法の同門）に加へ精神的な土壤迄共通して居る、即ち塊カトリック。シューベルトハ長調の大交響曲に、ブルックナーの交響曲と云ふ堪へられなひ重量級プロも近頃では普通に見られるやうになつて来た。

一方マーラーではどうか？ 此方も全てシューベルト↓マーラー歌曲のリサイタルを組んでみたら解る… 勿論歌手とピアノリスト（或るひは指揮者）の素養と見識、其れに興味は問はれる。しかし、此れを理想的にプログラムミング出来なひやうな演者に、佳き解釈等求めやうがなひ。

或ひは口短調『未完成交響曲』の後マーラーのどのの交響曲でもいい、持つて来て嵌め込んでみたら？ 此方も理想的な管弦楽コンサートを堪能出来るであらう、様々な面から。

本質的に非カトリックであるマーラーは然し、漂泊の吟遊詩人としてシューベルトの後継を地で往く存在だった、やはりボヘミアの。

つまり2人は、シューベルトを一方は父方、他方は母方の親として血を継ひだやうなもの。

2020 03.16/03.27

※1 マーラーは此の曲の弦楽オーケストラ版を書き既にレパートリー作品として定着して居る

※2 もし『ブルックナー・マーラー』といつしよくとに語る人が未だ居たら？ どちらをも理解して居なひと断じて一向差し支え無ひ。

※3 シューマンが此の曲を『天国のように長大な』と評した事は余りにも有名。一寸聞くと冗長だ、と貶して居るやうにもとれるが全く違ふ、彼は感嘆し褒め称へたのだ。

「今回のディスク」Fr. p. シューベルト 弦楽五重奏曲ハ長調 D 956 (1838) ①アマデウス Q, W. プリース vc. (rec. 1952) ②ヴィーン・コンツェルトハウス Q, G. ヴァイス vc (1950) A. ブルックナー 弦楽五重奏曲へ長調 (1879) ①コチアン Q, L. マリー va (1983) ②フィルハーモニア五重奏団, ヴィーン, H. ヴァイス va (1974)

コロナの時代の愛 (上)

古賀 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

このロックダウンの折も折、ドイツシュ・ウオツシャーが壊れた。こちらでは皿洗い機への依存度は高く、手で洗う人は超マイノリティー。機械自体も大きいので、汚れた食器を溜めに溜め、寝る前にスイッチオン、てな使い方をする人が多い。

修理を頼んでも来ないだろうし (Essential Business/ 必要不可欠な業務、というもののしか営業を許されておらず、食洗機修理は恐らく該当しない)、しようがないので手で洗うんだけど、これが思いの外、楽しい。

家事は僕の役目で、会社を辞める前は特に、炊事とか段取り良く進めることを心懸けていた。時間の掛かるものから手番良く調理して行き、手が空くと小まめに片付け、完了した時点でのキッチンは何事もなかったような様相を呈している、といった手際の良さに深く自己陶醉していた。

しかしリタイア後、特にロックダウンで何もすることがなくなると、段取りとか手順とか考えることの方が実は不毛で、喫緊などという概念とは無縁の家事のアレコレの、無駄だらけの達成に向け、湯水のように時間を掛けることで贅沢三昧、といった感興に浸ることができる。皿洗い然り、料理など、わざと段取り悪くやったりする。

コロナの功罪、などと言い出すと不謹慎の誹りを免れないので止めておこう。

ガロシア・マルケスに『コレラの時代の愛』、というノヴェラがあるが、最も早く、意味のある仕方、コロナを主題にする作家は誰だろう？

僕もちょっと考えてみた。

こんな話である。

男…日系の大手製造業の現地 (米国) 法人社長。四十歳で、本社では最若手の常務取締役。

女…その会社の Chief Legal Officer、主席法務役員。四十歳。

奈良さんに僕の小説には「頭のいい愛人」が頻出する、と指摘されたが、この女もその類型である。

男の初回のアサインメントは、北米拠点の事務統括で、役職名は Executive Vice President (EVP)、着任時四十二歳であった。製品（事業部）毎にばらばらに米国に進出し、人事処遇等で足並みの乱れた状況の一掃に、本社経営企画部のエースが投入された。

工場を束ねる、ホールディング・カンパニー設立がこの男のミッションで、取り敢えず、山崎と呼ぼう。契約法、税法、雇用法、といった、この国で会社を立ち上げる際の法律の煩雑さに絡め取られ、弁護士費用も嵩む一方で、自前の法務部設置が急務であると痛感し、外部弁護士事務所、Ganes & Co. Ley の企業法務部門主査で山崎の会社の担当をしていたシドニー・ヒギンズ、三十四歳を引き抜き、Chief Council（主席法務顧問）の席に据える。

カナダ、メキシコを含む北米全域に点在する工場、日本本社への出張、と二人はほぼ四六時中、行動を共にすることとなる。

若くして大企業の要職にある二人は、何よりもその野心で繋がっていた。ホールディング・カンパニーが軌道に乗ると、山崎は一旦帰任し、その功績が評価され、常務取締役となる。三年後、今回は北米統括本社の社長として再度赴任し、着任と共に、パワーズと姓が変わって

いるシドニーを、Chief Legal Officer に昇格させる。

新しい CEO は、北米での経営を一本化する際、生産拠点の、名目だけのアメリカ人トップ達をパージする際の、策略めいた、手段を選ばぬ山崎のアプローチを思い出し、最年少で本社役員に昇格したのも、綺麗事だけではなし得なかつたであろう、という確信を伴う推察をした。また主席法務顧問から主席法務役員に昇進した女は、自分同様、欲望に忠実な山崎が、法務手腕だけで自分を弁護士事務所から引き抜いたのでないことを熟知しており、今回の昇格の意図も、再赴任に伴う新社長への忠誠を新たにすることと理解した。女にとって、何故か山崎の思考を追うことは容易である。

一回目のアサインメントで、二人の仲が深くなると、山崎はシドニーにできるだけ早く結婚することを勧めた。Level playing field（条件を対等にする為に）、というのが理由であった。山崎は、社長として再度赴任すること、それに伴う女との関係の再開を確信していた。そして女の結婚は、関係の隠蔽に幾分かは寄与するであろう。男の提言に従ってか否かは不明だが、シドニーは山崎の帰任直後、ロイ・パワーズという、引き抜かれる前に所属していた弁護士事務所の上司と結婚した。

相変わらず一緒に出張することが多いので、敢えて逢

瀬を工面する必要はないのだが、出張のない週末、会社
に厚生施設と言う名目で購入させた、山崎以外に使用す
る者のいない、郊外のゴルフ場内にある別荘で、木曜の
夜を共に過ごすのが慣いであった。

〈続く〉

緊急コロナ会議

地球探検家の証言

芝野 浩貴

(地球探検家)

(連絡) 私の音信不通の寄稿についてだが、奈良さんか
らその月の掲載予告が来た時に次の月の原稿を送信して
しまうので、タイムラグは生じる。内容に関してのコン
セプトは、過去実際に私が経験したことを基に、原稿を
書くその時の社会と結びつけて未来完了の形で書くとい
うもの。

例えば4月掲載の前号の45号の最後の文「コロナ菌は
新学期という時など知る由もない」という文は2月中旬
に未来予想して書いたものである。実際今もコロナウイ
ルスは増殖中で、学校も休校、職場もテレワークに移行
し収まる気配はない。46号の原稿提出の3月下旬には原
稿はできていて、「海外には行かない方がいい」と判断
した3月上旬に都内に潜伏し、ミニシアターを周り、そ
の報告を掲載するつもりだった。

ライブでしか映画は観ない。サブスクは使わない。こ
れまでの人生、ほぼ専門家並みにフィルムは観てきた。
地球の全てを歩き尽くす時間はないので、ドキュメンタ

・ 定有堂書店 店頭からのご案内

シヴァ神十数理哲人の本

『数学のことば vs 教育のことば』 プリパス 2017

『数学を奏べる授業』 プリパス 2020

(編集部注) シヴァ神 || 芝野浩貴さん

リーには特にお世話になった。大事なことは映画に教えてもらったという面もある。コロナ禍でミニシアターの存続が危ぶまれている。

井浦新、是枝裕和、白石和彌などが立ち上げた「SAVE THE CINEMA」には賛同するが、感染症に対する政府の対応がまずい。日本人の動き方もまずい。ウィルスを舐めている。そこで、今号は原稿を差し替え、人類の危機の今の今、日本が沈没していくのをどう見てるか、地球探検家にインタビュールしたものを締め切りギリギリまでコロナ禍と向き合い、載せることにした。

(注)地球探検家とは、「シバノヒロキ」の体を借りて、海外ジャーナリスト、国内紀行者、武道家、数学者、教育者、司書、人間表現鑑賞家、「S」(預言者)などが動的平衡に目まぐるしく変わる生命体である。

〈2020月24日までの出来事〉

(2019年12月 数字雑誌「現代数学」の数学戯評で「私は菌になりたい」を寄稿し、人類へ警告 音信不通41号参照、数奏ではP 24・25)

1.16 日本最初の感染者

1.24 安倍首相中国へ来日の観光誘致

東京初の感染者(ソウルは1.23)

2.19 岩田健太郎 ダイヤモンドプリンセスのゾーニングの

失敗に言及注①

2.29 安倍首相休校要請

3.1 下関南高校の松村成通先生の「進路通信」

配信開始 注②

3.21 東大全共闘 vs 三島由紀夫観賞(奈良さんの知人出

演) 注③

3.23 東京がソウルの感染者数上回る

3.24 1年間オリンピック延長合意 注④

3.25 インドロックダウン 開始注⑤

3.26 那覇市内の不屈館 内村千尋館長と対談

3.30 進路通信30号にて私から松村先生に宛てた10年前のインドハイデラバードからの手紙掲載 注⑤

3.31「シバノ非常事態宣言」注⑥

進路通信31号で下関南高校の生徒へ激励

4.1 マスク配布案、ベトナム外出禁止令

音信不通読者でもある都内ボランティア協会のAさん

「コロナ日記」開始

4. 3 入国者にPCR検査開始、京大望月新一教授のabc予想の専門誌への掲載発表

4. 7 7 都府県に緊急事態宣言発令

4. 8 数理哲人の「緊急事態宣言日記」開始

「数学を奏でる授業」緊急出版、即日完売 増刷中

(引用する時、数奏と略記している)

「注文の仕方は、プリパスウェブショップ

<https://www.rakuten.co.jp/prepass/>

の知恵の館文庫の中の本のタイトルの「数学を奏でる

授業」で検索 シヴァア神&数理哲人共著 キャッチフ

レーズは、「マスク2枚でコロナは防げずマスク2名

でコロナを避ける」

4. 10 鳥取初の感染者

4. 11 琴浦町河本家住宅にて小谷恵造先生の「掛け軸を讀

む会」に参加

ライフゲームの提唱者コンウェイコロナ肺炎で死亡(82歳)

4. 14 江津市館下茂雄先生企画学び祭参加 注⑦

(数奏 P18, 19 参照)

4. 18 スイス再生産数 0. 39 に

4. 23 琴浦町飲食店へ10万円配布開始 注⑧

4. 24 1都3県 STAY HOME 週間宣言

厚労省抗原検査確定診断導入検討 注⑨

(進路通信 52号から54号も加速してるなあ)

注①：平尾剛さんは元ラガーマンの日本代表だがオリンピックと経済を離せと主張し続け、岩田健太郎さんは自ら感染症専門家としての目線で警告された。10年前にウィルスの講演会の懇親会で出会ったおふたりがコロナ禍に関連していて驚いている。

注②：即日一斉休校に従ってる学校が多くてびっくりした。従うのが悪いのでなく休校要請は、子供も職員にも手当を払わなくてもいいからで、経済と切り離して自らの頭で子供達に伝え続けている教員もいて安心はした。休むのが目的なら学校はいらない

注③：「観念的な遊びはいらない、俺は三島由紀夫を殴りに来たのだ」という学生がいたが、自決をその時点で覚悟して、右翼か左翼かでなく、生命を見つめて後輩と包容力を持つて対談する三島に政治家や教育者への挑戦をみた。

注④：東京とソウルが同じ時期に感染したが、この時に感染者数は逆転しソウルは収まり東京は爆発。数学的曲線で真実は暴かれる。

注⑤：初感染者の日から10日で宣言。人口が多くて都市

から追い出される移動者も絶えず、収まってはいるが、人工呼吸器の生産地がハイデラバードであることは注目。世界に貢献してゐる。

注⑥：国や県の緊急事態宣言が遅いことにイライラし、関係者に発送。内容は数学者なら

(1) お金を一律に配布(なぜなら、誰にあげるあげないを調査したり選別する暇もないから)

(2) 交通機関(特に電車・地下鉄)のストップ

(食料や医療物質などライフライン輸送は除く)

(3) 仕事は休み (4) 15日間こもる

の順に非人道的に超法規的に実施し命守るべし

注⑦：学びは感染する。地域包括医療から死生学、言語論芸術論、AIを経てレンマ学でまとめ。「いのち すきまつなぐ」が大事なこの時期タイムリーな学び舎があることに衝撃と安心

注⑧：学ぶ首長のいのち優先の勇気ある速断。政治家や教育者の使命は目の前の命を守ることと次世代に命を繋ぐこと。

注⑨：不要不急を控えるというが、私は常に用事はないし、急いでない。しかしコロナ禍以前から毎日緊急事態宣言

を出して行動。失業率と自殺率は相関あり。ステイホームと言うが、家もお金もない人はどうするのか？

これから、ワクチン競争に巻き込まれ、ギランバレー症候群のようなことも起こるだろう。

今は人との接触だけでなく、ステンレスやプラスチックからの感染をも意識しなくてはいけない。もし、私が議員や公務員なら給料を寄付するだろう。音信不通45号で奈良さんが引用された小原修治文化センター長とよく話す。貨幣に毒されている人類について。贈与論、負債論(汽水空港にて読書会継続中)、ゾミア、反穀物の人類史、MIT 理論を読み、頭を冷やしてほしい。

歴史に学ぶなら、ケルマック・マッケンドリック(1927)論文の Susceptibles: 感受性人口、Infectious: 感染人口、Removed: 隔離人口の関係を示したSIRモデルも参考になる。(感受性人口は感染人口との接触により感染する。接触率は、両者の密度の積に比例。感染人口は一定の率で隔離人口に移る)精神主義ではコロナウイルスには勝てません。学びワクチンを自家培養しましょう。

少数者だから出来ることがある。それは山陰から始まると。ずっと言ってきた。数学するとは社会の中に蹲って預言することである。

あきの素生

(くうねるめがね)



コロナのこととは無関係なことを書きたいと思っ
たが、何やかやと振り回され、このことばかり考えがち
な中では、なかなか難しい。とにかくこまめに手を洗っ
ている。おかげで肌がかぴかぴしている。見えないもの
を相手にするのって、ひどく消耗する。体力や考える力、
その他諸々、消耗していつている気がする。消耗してい
るという自覚だけは、持ち続けていたいけれど。

家において、余計なことを考えて悶々とするよりは、と、
布マスクを作ることにした。インターネット上に、いろ
んなタイプのマスクの作り方がアップされている。シン
プルな長方形、立体型、プリーツ入り、縦横プリーツの
幅それぞれ何センチ、ときちんと測って型紙を作るもの、
わりとぎっくりフリーハンドで形を決めていくものなど、
さまざま。布地の性質なども紹介されていたりする。と
いつて、ダブルガーゼなんて持っていないし、それを買

うために出かけるのは本末転倒な気がする。そもそも、
今時分、手芸店にマスクの材料になりそうなものは残っ
ておらんのでは、ということ、で、衣装ケースの奥から、
使っていないハンカチとTシャツをひっぱりだした。根
がものぐさなので、型紙は作りたくない。余計なことを
考え始める前に、とにかく作り始めたい。こういうフラ
イング気味なとっかかり方が、却って手間を増やしたり、
のちのち後悔につながったりするんだよなあと思いつつ、
そんなことを考えるのも面倒になって、寸法をざっくり
布地に直書きし、じよきじよき罫を入れた。

ちなみに、ミシンを持つていないので、すべて手縫い
だ。ひと針ひと針、縫い目の間隔を揃えることだけ考え
る。普段から、「今、ここ」に集中すること、集中でき
る時間を大事に思っている。太極拳やヨガ、ストレッチ
は、自分の体のどこがどう動いているかを感じながら、
どう動かすかに集中できるところが好きだ。絵を描くと
きも、ものや写真を見ながら、線で形を再現すること、
濃淡を写し取ることに集中するのが心地よい。その点で
は、布マスクを手縫いで作るのも、なかなか効果的だ。
しかも、マスクができる。時間がかかること、数があま
り作れないこと、肩がこることは、この際棚に上げてお
く。

予想どおり、ああこんなところ切るんじゃないかと、

ここ折る必要なかったじゃんとか、行きつ戻りつしながらも、少し歪んだマスクがひとつ完成した。

そんな風にコロナ禍を過ごしていたら、実家から郵便が届いた。何やら厚みがある。母も布マスクを作ると言っていた。もしや、お手製の布マスクを送ってくれたのでは、と、感謝をしながら封を開けると、厚紙に包まれたものが出てきた。マスクにしては小さい。一体何だろうと不審に思いつつ、更に厚紙を開いたところ、出てきたのは、なんとマンボ菓子であった。去年の秋にここで、昔お祭りで買うのを楽しみにしていたもののひとつとして挙げていた駄菓子だ（「屋台」『音信不通』第二期第三十八号）。カラフルな細いチューブに入った、白い練り粉のようなお菓子。想像だにできなかった光景だ。同封されていた手紙を読むと、弟夫婦が私にと実家に届けてくれたもので、帰省は当分難しそうなので、賞味期限が切れる前に郵送してくれたようだ。確かに、あの文章を書いたあと、いろいろなお店でマンボを探してはいた。でも、なかなか見つからず、あきらめて忘れていた。お正月に帰省したとき、そんな話を家族にしていたのだろう。この年齢になって、駄菓子を買ってもらうことになろうとは。しかもそれが郵送で届くとは。でも、マスクよりうれしかったかもしれない。それに、なんだか笑え

るじゃないか。日々起こるささいなことを、おもしろがって笑うのが、もともととても好きなのだ。五センチばかりのマンボが、七本ずつ入ったお菓子「セブネオン」。久しぶりに食べたマンボは、昔よりフルーツみ（オレンジ味？）となめらかさを増している気がした。三袋送ってくれたので、少しずつ味わって食べようと思う。

そして、この顛末を実際に家族と会って笑って話せる日が、一日でも早く来るよう願っている。その日まで、かぴかぴになった手を洗い続ける。



さよなら元気で



ドラメリア
(座敷わらし)

四月も下旬。制服のティーンエイジャーたちが集う場所に戻って、一か月が過ぎようとしている。エプロン姿で階段を駆け上がった日々から、「センセイ」と呼ばれる暮らしへ。今の学校は規模が大きくその前の学校とも大きく違うけれど、この場所を満たす独特の空気は共通していて、やはり少し懐かしい。

学校にいた頃に出会った生徒たちを、前の職場でちらほら見かけることがあった。仕事帰りに資料を探しに来たり、子どもと一緒に読み聞かせの会に参加してくれたり。ときには同じ職場の仲間として迎えたり。

卒業おめでとう、さよなら。元気でね。と見送った若者が、立派な社会人になり家庭を築いているのを見ると、やはり感慨深いものがある。見送って、見送って、さよならばかりが積み重なる場所だと思っていたけれど、時間が経てばそんな再会もあるのだ。あるいは、この春まで

の職場で接していた子どもたちにも、いつか学校で再会することもあるかもしれない。そうしてまた、おめでとう、さよなら元気で、と送り出していくのだろう。

いい話風になってきたところに唐突だが、五年ぶりの学校現場で何が一番嬉しいかというところ、「君たちのお母さんより年上です」と言い切っても無理がなくなってきたことかもしれない。年齢について訊かれるのが面倒で、十年ほど前からそれで通してきた。言い始めた頃はだいぶ頑張らないと難しい年齢差だったが、自然になつてきた。コツは、毅然と言いつけること。そして、異論を認めないこと。



・編集後記:

友人に手作りマスクをもらいました。わたしの好きな紫。以前にシュシュも作ってもらったので、これでトータルコーディネートが可能に。

ドラメリア (編集長)

本年度の文学界新人賞の最終候補に、古賀啓三さんが残りしました。快挙です。二〇一一年に同賞を受賞した水原涼さんにお願ひして、激励をかねて「新人賞」と「作家」であることについて、寄稿していただきました。

奈良敏行 (発行人)